

ニューヨークのまちかどを彩る彫刻

アメリカ合衆国の屋外彫刻（パブリックアート）について視察の機会を得た。パブリックアートをまちづくりに積極的に活用してきたアメリカでは今、地域の歴史・風土やコミュニティとの結びつきを大切にしたいパブリックアートの設置が盛んに行われている。今回訪問したニューヨーク、ヒューストン、ロサンゼルスにおけるこれらのさまざまな活動は、アーティスト、まちづくりの専門家、行政関係者などの熱心な努力と長年の試行錯誤の中から生み出されていた。社会的な背景やまちづくりのしくみが全く異なるアメリカの取り組みが、そのまま我が国で活用できるわけではないが、まちづくりにおける屋外彫刻設置の意義や役割を考えるうえで大変興味深いアメリカのパブリックアートの最新情報を、ニューヨーク市の取り組みを通じて皆さんにご紹介したい。

ニューヨークのまちかどを彩る彫刻 都市空間を支配する巨大な彫刻

合衆国の経済・文化・芸術活動の中心地であるニューヨークでは100年以上の長い年月をかけて置かれた数多くの屋外彫刻を見ることが出来る。マンハッタン島内のおもだった作品だけでも1884年に完成した自由の女神像をはじめとして優に300点を超えているらしい。ところがそれらの彫

刻には1960年ごろを境に大きな変化が見られる。それは、英雄、神話、文化人などをモチーフとした記念碑としての彫刻から、都市空間を演出する美術品としての屋外彫刻への明らかな変化である。その背景となったのが1960年代から連邦政府が全米で実施した「政府関係の建物には建設費の0・5%の予算を使い積極的に屋外美術品を置く」という先導的な施策や、全米芸術基金が進めた

都市空間を 支配する 巨大な彫刻



マリン・ミッドランド・ビルの広場にあるイサム・ノグチの作品「レッドキューブ」



チェイス・マンハッタン・プラザにあるジャン・デュビュッフェの作品「グループ・オブ・フォーツリーズ」

福岡市都市整備局都市管理部都市景観室推進係長 真隅潔



「公共的空間における屋外美術品の設置計画」であり、このような国家的プロジェクトを原動力として、1960年代から70年代にかけて、カルダー、リバーマン、イサム・ノグチやデビュッフェなどの巨匠たちによる巨大な屋外彫刻が全米各地の都市に数多く設置された。

ニューヨークで見たこれらの作品は、超高層ビルと対峙しながら、広場を行き交う人々にシンボリックで強烈な印象を与えていた。それはまた、広大で陽気な精神を持つアメリカにふさわしい作品のようにも思えた。もしこの場所に屋外彫刻がなかったら、この広場は何のぬくもりも感じない無味乾燥の鉄とガラスとコンクリートの空間にすぎなくなってしまう。そう思えるほどにこれらの作品は広々とした都市空間を支配し、強烈なメッセージを発信していた。

しかし、巨匠たちの同じような作品が全米に広がったことによって、今、これらの彫刻は次第にブロップアート（いきなり落ちてきたアート）と呼ばれるようになってきている。都市の歴史や風土と何の関係もなくぼちぼちと落ちてきた作品というような批判的な見方である。

ニューヨークのまちかどを彩る彫刻
バッテリーパークシティの
アートプロジェクト

1980年代になるとブロップアートへの反省から、その土地特有の歴史・風土やコミュニティなどと深い関係を持つ屋外彫刻、いわゆるパブリックアートの設置が盛んに行われるようになってきた。それらは与えられた場所に美術作品としての屋外彫刻を設置するという考え方から、アーティストが都市の文脈を読み取り、都市空間を意味づけ、創造するというようなイメージに変化している。このためその創作活動においても、建築家やランドスケープアーキテクトとアーティストがコラボレーションと呼ばれる共同作業を通じて場所を創造する取り組みが増えてきている。

バッテリーパークシティ公社が進める大規模な再開発プロジェクトにおいて、建築物や広場・公園などの設計者たちは、パブリックアートを再開発によるまちづくりの重要な資源と考え、設計の段階からアーティストを積極的に参加させた。この結果20人近い作家によるさまざまなパブリックアートが、ハドソン川に面するニューヨ

バッテリーパークシティの
アートプロジェクト



世界金融プラザ広場にあるスコット・バードンの作品
幾何学的で象徴的な柱やベンチの作品は広く絶賛されている

バッテリーパークの中心、世界金融プラザ広場の風景
[21世紀の夜明けに向かい、ニューヨーク市のために整備された熱狂的な舞台]と解読されている



世界金融プラザ広場にあるシア・アルマジノのフェンスの作品



南の入江にあるアメリカの代表的な環境彫刻家のメアリー・ミスの作品
この空間は自由の女神の冠を思わせるメタルタワーや木桟橋、ロックガーデンなどで構成されている
(提供：株式会社パブリックアート研究所)



ークで最も歴史的な場所に設置されることになった。

パツテリーパークシティーの中央に位置する世界金融プラザ広場は、周辺の建物を設計したシーザ・ペリ、ふたりのアーティストおよびランドスケープアーキテクトのコラボレーションでできあがっている。彼らは構想の段階からこの場所の過去と未来に視点をおいて、自由で祝祭的な空間造形のために力を合わせた。陽気なニューヨークの精神を讀えるウォールト・ホワイトマンとフランク・オハラを引用したシア・アルマジニのフエンスの作品、スコット・パルトンの幾何学的で象徴的な机やベンチの作品などは、パブリックアートと言われなければ気がつかない作品だが、知らず知らずのうちに訪れる人々の好奇心を呼び起こし、この場所に新しい意味を与え、景観に対する人々の関心を高めている。

ニューヨークのまちかどを彩る彫刻
**公共施設の
パブリックアート事業**

アメリカにおけるパブリックアートの設置は、全米芸術基金に加えて地方自治体が独自の制度とし

て設けるパーセント・フォー・アート(事業費の1%を芸術作品の設置に当てる)制度に支えられて飛躍的に進展した。

ニューヨーク市では1983年に「パーセント・フォー・アート条例」を施行し、マンハッタン特別区など5つの行政区における市の建物へのアート作品の設置を推進している。施設にアート作品を効果的に設置することによって市の建物を感性豊かにすることを目的として開始されたものである。その対象となるのは、5つの行政区における一定規模以上の市の建物(小学校、消防署、警察署、裁判所、病院、公園、清掃工場、下水処理場など)で、これらの中から市民が近づきやすい場所にあることなどを条件に選考されている。

ニューヨークのパーセント・フォー・アート制度では、建設費の1%を芸術作品の設置に当てるように義務づけている。実際の1事業当たりの予算額は最低1万ドルから最高40万ドルまで、1年間に実施するパブリックアートの設置費の総額が150万ドル以内に制限されているので、できる限り効果的な対象事業を選定しなければならぬ。こうして1983年の

**公共施設の
パブリックアート事業**



第23小学校(ハーレム特別区)のたたくと音の出るアート。風の音を聞くアート、シンバルのように向き合った2枚のステールの中で手をたたくと、すごい振動音がするアートなど、子どもたちの感覚を育てるすぐれた作品群である
作家名:ビル・ビュッヘン、メリー・ビュッヘン
作品名:サウンド・プレイグラウンド

クイーンズ裁判所にある新宮晋の作品「太陽との対話」
(提供:ニューヨーク市役所)



実施以来、完成したプロジェクトは105か所、進行中のプロジェクトが75か所にものぼるが、これらの事業はすべてニューヨーク市の文化事業部が一貫したシステムで運営している。文化事業部は、建設事業の開始時期にアーティストを選定する。与えられた場所からアーティストを置くのではなく、建設事業のパートナーとして最初からアーティストを参加させ、地域の歴史・風土やコミュニティとの結びつきを大切にしながらパブリックアートの設置を目指しているからだ。また、市民の意見を反映させるため、アーティスト選定のため委員会にコミュニティボード（自治区の代表者）の出席を求めたり、地元の要望や近隣の土地柄・特性を調査し委員会に示すなど、常にパブリックの主役であるコミュニティの理解を得る努力が払われている。

ニューヨークのまちかどを彩る彫刻
芸術を楽しめるまち

ニューヨーク市役所のアートディレクターであるシャーロット・コーエンさんは、パブリックアートの設置について「自分たちはただ彫刻を設置しているのではな

く、都市空間を演出している」と話されていた。ニューヨーク市のタイムズスクエアの中央分離帯にある横断防止フェンスには、アーティストによるさまざまな表情を赤いスチール線で描いたユーモラスな作品が設置されており、刺激的なまちかどにはつととするような雰囲気を作り出している。シャーロットさんが言う都市空間の演出とは、ガラスと鉄とコンクリートに埋め尽くされてきたニューヨークの都市空間に人のぬくもりを取り戻そうとする新しい試みのようにも感じられた。

福岡市は1983年に「彫刻のあるまちづくり事業」を開始し22点の屋外彫刻を設置してきた。この試みは民間にも広がり、今では福岡市内でも90点を超える屋外彫刻を見ることが出来る。最も新しい作品は昨年10月に完成した博多の森球技場の「PIM・PAM・POM」、フランス人の作家の手による底抜けに明るい作品だ（24ページ参照）。目標は市民が身近にふれあうことのできるパブリックアートの視点を持った作品の設置。芸術を楽しめるまち福岡を目指して、今後とも芸術の香り豊かな都市空間を演出していきたいと考えている。■

芸術を楽しめるまち

モニカ・バンクスのフェンスに取り付けられた作品
 喜び、悲しみなどさまざまな感情を持つ34の鎖が描かれている



サイプレスヒルズ図書館の
 ゲートフェンスを使った
 ローランド・プリズノの作品
 「ファミリーライブラリーテーブル」
 (提供：ニューヨーク市役所)



第34小学校にあるビッキー・スカリの作品
 「バタフライガーデン」
 (提供：ニューヨーク市役所)